

第 20 回児童虐待防止対策協議会	資料 4－2
平成 29 年 11 月 22 日	

「公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン」
提出資料



© Louis Leeson/Save the Children

子どもを誰ひとり
取り残さない



Save the Children

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
2016年度 年次報告書
【ダイジェスト版】

生きる、育つ、守られる、参加する。

世界中すべての子どもの権利が実現された世界を目指して。

VISION

セーブ・ザ・チルドレンは、すべての子どもにとって、生きる・育つ・守られる・参加する「子どもの権利」が実現されている世界を目指します。

MISSION

セーブ・ザ・チルドレンは、世界中で、子どもたちとの向き合い方に画期的な変化を起こし、子どもたちの生活に迅速かつ持続的な変化をもたらします。



創設者 エグランタイン・ジェブ

世界で100年、日本で30年。

セーブ・ザ・チルドレンは、生きる・育つ・守られる・参加する「子どもの権利」が実現された世界を目指して活動する国際NGOです。1919年にイギリスで設立され、現在約120ヶ国で活動しています。子どもの権利のパイオニアとして、国連や各国政府からもその専門性を認められ、世界中で、子どもを

取り巻く環境に変革をもたらしています。日本では、1986年にセーブ・ザ・チルドレン・ジャパンが設立。海外では保健・栄養、教育などの分野で活動するほか、紛争や自然災害における緊急・人道支援を行っています。また、国内では、子どもの貧困問題解決や子ども虐待の予防などに向けた事業のほか、東日本大震災や熊本地震などの大規模災害における緊急・復興支援を通して、子どもの権利を実現する活動を行っています。

日本を含む約120ヶ国で活動

2016年、セーブ・ザ・チルドレンが
直接支援を届けた子ども

56,315,024人

大人も含め91,812,417人

■ 2016年 セーブ・ザ・チルドレンが活動した国や地域

*上記のうち、■はセーブ・ザ・チルドレン・ジャパンが
駐在員を派遣するなどして事業を実施した国や地域

緊急・人道支援

自然災害や紛争などの影響を受けた子どもや地域社会に対して、迅速かつニーズに合った支援を行い、人々が日常を取り戻したり、生活を再建したりできるようサポートします。



保健・栄養

妊産婦と新生児のケア、感染症や栄養不良の予防と治療、保健システムの強化などを通し、すべての子どもやその家族が、良質な保健サービスを受けられるよう支援します。



教育

すべての子どもが質の高い教育を受けられるよう、学習環境の改善、教員の能力養成、地域社会の意識向上、給付型奨学金の提供、就学前教育の普及などの活動を通して支援します。



子どもの保護

子どもを暴力、虐待、搾取から守るための取り組みや、安心・安全に成長できる環境づくりを、行政や地域社会、保護者、子どもたちなどさまざまなステークホルダーとともに推進します。



防災（災害リスク軽減）

防災に子どもたちの声が反映され、災害時に子どもたちが主体的に行動できるよう、地域社会の防災体制を強化。子どもを中心とする防災を推進します。



子ども参加

子どもを取り巻く課題に対し、子ども自身が意見を表明し社会に参加する機会をつくり、子どもの意見が社会の取り組みや政策に反映されるよう働きかけます。



小学校に通うモンゴルの小学生。セーブ・ザ・チルドレンは、モンゴルで親元を離れて小学校生活を送る遊牧民の子どもたちを支える活動を行っています。

海外での活動

緊急・人道支援



シリア危機をはじめヨーロッパ難民危機、南スーダン、イラク、ガザなどの人道危機において、難民や国内避難民の子どもとその家族へ食料や物資の配布、保健衛生や心理社会的支援、教育機会の提供、子どもの保護などを行いました。5月の世界人道サミットでは、緊急下の教育支援に関する政策提言を行いました。



自然災害においては、夏の干ばつによる牧草の不足や、冬の大雪や厳冬からなるモンゴル特有の寒雪害「ゾド」で被災した遊牧世帯の子どもたちへの支援を実施しました。また、「いのち・みらい貯金箱」を活用し、災害や紛争などの影響を受けた世界各地の子どもたちとその家族に迅速に支援を届けました。

保健・栄養



栄養不良や感染症の予防と治療、さらに、誰もが質の高い保健・医療サービスを受けられる社会を目指し活動しました。ミャンマーでは、安全な出産と健康な新生児の誕生を促進するため行政と連携し、補助助産師の育成や保健局の組織能力強化、医療従事者の技術研修など、地域の保健システム強化に取り組みました。



また、ベトナムでは、格差拡大により厳しい生活を送る少数民族に対して2歳未満の子どもの栄養状態の改善を目指し、家庭で栄養豊富な食料を確保できるよう家庭菜園研修や妊産婦への保健指導を実施しました。タンザニアでは、幼稚園に通う子どもたちの栄養改善のため、給食の提供や調理法の研修を行いました。

教育



子どもたちが基礎的な読み書き計算能力を身につけられるよう、また、教育の質の向上を目指して活動しました。モンゴルやスリランカ、タンザニアでは、就学前に教育の機会を得られなかった子どもが小学校入学後、困難なく授業が理解できるよう、就学前教育の提供や教員研修などを行いました。



また、基礎教育支援として、学習環境の改善や教員の研修を実施しました。モンゴルでは、幼稚園経験のない子どもが小学校へ適応できるよう入学後の支援を実施し、インドでは、授業を深く理解できるようなデジタル教材の開発、インドネシアでは、貧困層の若者を対象に職業訓練事業を実施しました。

子どもの保護



ミャンマーでは、紛争後の社会で子どもたちが安心して生活できるよう子ども保護のしくみを強化しました。モンゴルでは、行政機関が子どもを保護するしくみを強化できるよう支援したほか、2004年から取り組んだ体罰全面禁止の法制化が実現しました。

防災(災害リスク軽減)



ウガンダやベトナムでの災害・気候変動への対応能力の強化、インドネシアやタイでの学校を基盤とした防災教育、インドネシアでの子どもたちと青少年のための交通安全など、地域や行政とともに、子どもを中心とした防災事業に取り組みました。

日本国内での活動

子どもの貧困問題解決



日本では現在、6人に1人の子どもが相対的貧困下にあります。**経済的に困難な状況に置かれた子どもたちを、特に東日本大震災と熊本地震の被災地で支援しながら、日本における子どもの貧困対策の充実に向け、調査や行政への働きかけを行いました。**

子ども虐待の予防



すべての子どもが、家庭的な環境の中、安心・安全に成長することができる社会を目指し、**親子の関係づくりや子育てを学ぶ機会の提供や、法律の見直しや社会啓発の推進**を通じて、保護者の支援の充実と虐待の早期予防を目指した活動を展開しました。

子どものための心理的応急処置



災害などの緊急時に、ストレスを抱えた子どもや保護者を支える支援者のために開発された**「子どものための心理的応急処置」**。**「見る・聴く・つなぐ」**を基本行動原則とした、専門家でなくても誰もができるこころのケアの手法の普及と研修を実施しました。

東日本大震災復興支援事業フォローアップ



2015年末まで実施した事業のフォローアップとして、岩手・宮城・福島県の水産関連高校7校での**給付型奨学金の提供、子ども参加によるまちづくり事業、福島県における放射能リテラシー事業**を継続しました。

日本国内での活動【熊本地震 緊急・復興支援】

緊急支援



4月14日の地震発生を受け、益城町を中心に、子どもや保護者のニーズ調査に基づいた**緊急支援物資の配布**を行ったほか、子どものための安心・安全な空間**「こどもひろば」**を避難所に開設し、被災直後のこころのケアに役立つ遊びの場を提供しました。

教育



給食センターが被災した益城町の小中学校への**給食支援や、学用品や学校備品の提供、学校活動への支援**を実施したほか、住宅が一部損壊以上もしくは経済的に困難な状況下にある子どもたちをサポートするための、**給付金**を提供しました。

子どもの保護



子どもたちの放課後の居場所である**放課後児童クラブ(学童保育)**の支援員への研修や、仮設プレハブ建設工事費の一部支援を実施したほか、園舎が被災した保育園や子育て支援施設、児童館に必要な**備品**を提供しました。

子ども参加



益城町をはじめとする県内の小中高生に、**復興に向けたまちづくりについて考え、行政や地域社会に対して発表する機会**や、東日本大震災で被災した子どもたちとともに、復興や防災に対する思いを発信する機会をつくりました。

防災



余震が続く中、非常時の備えとして、**防災ずきんや非常用持出袋**などを幼稚園、保育所、小中学校、学童保育にて、約15,000人に対して提供しました。また、防災教育教材を活用した研修や子ども向けの防災出前講座を行いました。

持続可能な開発目標(SDGs)への取り組み



持続可能な開発目標(SDGs)は、貧困や不平等・格差、気候変動などのさまざまな問題を根本的に解決することを目指す、世界共通の17の目標です。子どもの権利を推進する国際NGOとしてセーブ・ザ・チルドレンも策定に関わったこの目標は、2015年に国連で全会一致にて採択されました。私たちは各地での事業やアドボカシー(政策提言)を通して、SDGsの達成に向けた活動を推進しています。

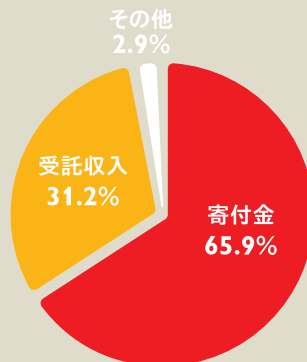
2016年度決算報告

経常収益 21億3,671万円

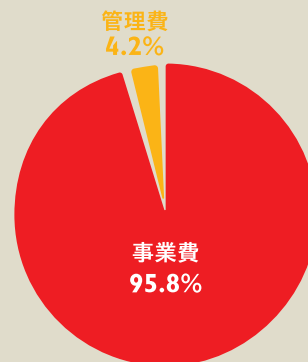
経常費用 20億9,098万円

2016年、個人の皆さまから、毎月の継続的なご寄付「SCサポート」を通じて1万人以上にご支援いただいたほか、夏や冬の募金キャンペーンなどを通してご支援いただきました。また、962の企業・団体からご寄付いただきました。

経常収益の割合



経常費用の割合



公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン

〒101-0047 東京都千代田区内神田2-8-4 山田ビル4F TEL 03-6859-0070

ご寄付はこちら: ゆうちょ銀行(郵便局)から 口座番号: 00900-1-120760 加入者名: セーブ・ザ・チルドレン子ども基金 【クレジットカードでのご寄付はウェブサイトから】

年次報告書完全版をウェブサイトで公開しています。

表紙写真: 紛争下のシリアからレバノンに逃れ、難民の子どものためのアートプロジェクトに参加した少女

日々、子どもと向き合うときのヒント

「ポジティブな子育て」をするために、私たちおとなが始められること

長期的な目標について考える

子どもには将来...

自信がある人、それとも怯えた人になってほしいのか？

幸せを感じている人、それとも怒りを覚えている人になってほしいのか？

暴力をふるわない人、それとも攻撃的な人になってほしいのか？

いまの自分の対応は、果たしてこれらの長期的目標につながっているのか？

イライラしたときにでも、子どもの心理的・身体的な安心・安全 を守れる方法を検討する

子どもを大切に思っていること、失敗をしたとしても、子どもの安全が脅かされることはないことをどう伝える？

どのように子どもを尊重し、明確な伝え方をするかを考える

子どもが学び、成功体験を重ねるためには、どのように情報を与える？

子どもの視点で考える

発達段階によって、子どもの考え方は異なります。だから、その時々と言動の背景にある理由も変化します。その変化に合わせて、どのように教える？

長期的な目標を立て、どのように子どもの安心・安全を守り、情報を与えるかを考え、子どもの考え方・感じ方を理解することで、私たちは日々の状況に応じた、**子どもに本当に学んでほしいことを、教えるための準備ができます。**

セーブ・ザ・チルドレンは、子どもの体や心を傷つける
罰のない社会の実現を目指しています。



たたかない、怒鳴らない、



ポジティブな子育て

子どもに教えるためには



子どもをたたいたり、怒鳴ったりして、
体や心を傷つける



子どもに必要な説明をし、尊重して、
ともに取り組む

子どもをたたいたり、怒鳴ったりして、体やこころを傷つける

疲れたりイライラしたとき、または子どもに教えるのに必要と信じているときに、私たちおとなは子どもをたたいたり、子どもを傷つけるような言い方をしてしまいます。

このような接し方は、子どもが

- 身体的に傷つきます
- 自信をなくします
- びくびくして落ち込みます
- 攻撃的になります
- 怒りや敵意を覚え、私たちとの関係を悪くします

子どもの体やこころを傷つけるような罰は、私たちが子どもに学んでほしいことを伝えません。

子どもに必要な説明をし、尊重して、ともに取り組む

しつけとは「教える」こと。「ポジティブな子育て」は、子どもが安心・安全な環境で、どんな暴力からも守られ、学び手として、ともに歩むことを大切にしながら、**子どもの言動を導き「教える」ためのアプローチ**です。

私たち一人ひとりができること

子どもを教える導くためにはどうすればよいのでしょうか？

1 長期的な目標を心に留める

人を尊重し、暴力を使わないおとなになってほしい、といった長期的な目標を常に心に留めておくことが重要です。そうすることで、たたいたり、怒鳴ったりといった衝動的な対応を避けることができます。

2 子どもの心理的・身体的な安心・安全を保障する

子どもは、安心・安全な環境で、社会性を身につけます。失敗をしたときに、たたかれたり、責められたりする経験は必要ありません。

3 子どもを尊重し、明確な伝え方をする

私たちが子どもを尊重した接し方をすれば、子どもも、私たちを尊重し、言葉に耳を傾けるようになります。

4 子どもの視点を理解する

子どもと話すとき、子どもの話を聴き、子どもの視点を理解しようとしてください。子どもの視点を通すことで、私たちはよりよい方法で、教える導くことができるようになります。

5 課題を解決する

上手に教えるためには、状況を見極め、前もって準備を整え、落ち着いた対応で心がける必要があります。

子どもは、どのように考え、感じるのでしょうか？

0~6ヶ月

この時期の子どもは泣くことがコミュニケーションの方法です。子どもは、信頼のおける、**自分のために耳を傾けて対応してくれる人**がいることを確信する必要があります。



6~12ヶ月

この時期の子どもは、自分の視界から消えても、人や物が存在し続けていることを、まだ理解していません。信頼している人がもう戻らないのではないかと恐れ、子どもは泣くのです。子どもが、**信頼できる人は自分のそばにいてくれることを学ぶことが必要**です。

1~2歳

よちよち歩きの子どものは、周囲の物を探索したり、触ってみたり、口に入れてみたり、落としてみたりしながら、学びを進めます。**安全な環境が整うと、子どもは探求を続け、様々なスキルをどんどん身につけます。**

2~3歳

想像力が育まれると、子どもが怖がる場合があります。**子どもの感じていることを尊重し、子どもの中に安心感を根付かせることがとても大切です。**



3~5歳

幼児期になると、遊んだり、たくさんの質問をしたりしながら、学びが進むようになります。遊びに対する**子どものニーズを尊重し、安全な環境が確保**されることが求められます。子どもの質問に**真摯に向き合い、丁寧に答えていくことが必要**な時期です。

5~9歳

就学すると、子どもは、新たな期待を背負い、新しい友人関係を築き始めます。難しい場面をどのようにすれば乗り越えられるのか、**たたいたり、怒鳴ったりなど暴力を用いない方法でどのように対立を解決できるのかを示していくことが必要**です。

10~13歳

10代前半になると、友人と多くの時間を過ごすようになり、同時に自身の信念や価値観を模索していきます。**子どもの高まる自立心を尊重しながら、子どもの安全を守る**ことが大切です。



14~18歳

この時期は、自分がいったいどんな人間なのかということを開き始めます。これまでにない多様なアイデンティティを試すことを通して、本来の自分の姿を見つけていくのです。**子どもの自立へのニーズを尊重しつつ、子どもを信頼する姿勢が極めて大切な時期**です。

たたかない、怒鳴らない ポジティブな子育てのために

ポジティブ・ ディシプリンの すすめ



ジョーン・E・デュラント

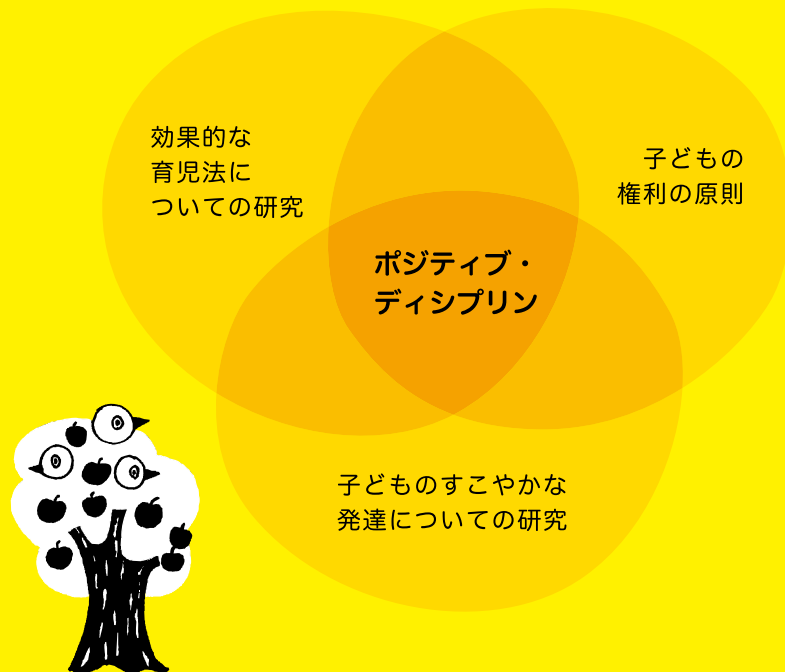


Save the Children
JAPAN

ポジティブ・ディシプリンとは？

ポジティブ・ディシプリンとは、子どもがすこやかに育つ権利、あらゆる暴力から守られる権利、学ぶ権利を尊重しながら、子どもに教え、子どもの行動を導くための子育ての考え方です。ポジティブ・ディシプリンは子どもの権利の原則に基づき、子どものすこやかな発達や効果的な子育てに関する研究成果を反映させて開発されたプログラムです。

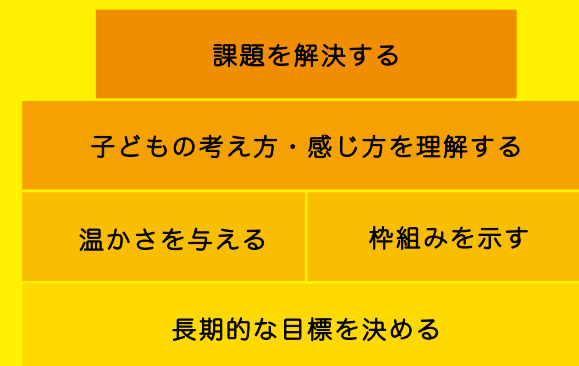
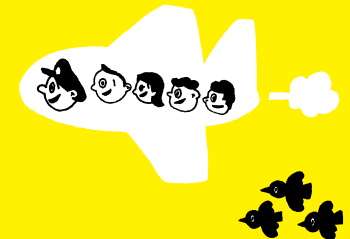
ポジティブ・ディシプリンは、放任主義の子育てではありませんし、もう一方で罰を用いるような方法でもありません。子どもの自立と生涯必要とされる力を伸ばすための、長期的な視野に基づく子育てを目指します。ポジティブ・ディシプリン是非暴力、共感、自尊心、人権、そして他者を尊重する精神を子どもに教えるものです。



ポジティブ・ディシプリンはどのように実践するの？

ポジティブ・ディシプリンには4つの原則があります。

- 1 子育てにおける長期的な目標を決める
- 2 温かさを与え、枠組みを示す
- 3 子どもの考え方・感じ方を理解する
- 4 課題を解決する

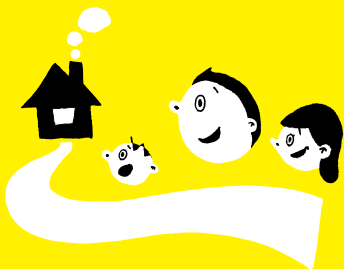


1 長期的な目標を決める

日々の子育ては、目の前の出来事に対処することで頭がいっぱいになってしまいがちです。つまり、子どもに今すぐ靴を履かせようとする、車道から今すぐどかせようとする、家に今すぐ帰らせようとする、妹をたたくのをやめさせようとするといったことです。このような場面においては、今すぐに何かしなければならぬという焦りからイライラやストレスが引き起こされ、私たちは子どもをたたいたり、怒鳴ったりすることがあります。

多くのおとなは、子どもの課題解決能力や高いコミュニケーション能力を育てたいと思っています。また、子どもとよい親子関係を保ちたいと思っています。そして、子どもには自信、優しさ、やる気、責任感や思いやりをもち、暴力的でない人になってほしいと思っています。しかし、子どもをたたく、怒鳴るといったおとなの場当たり的な対応は、子どもに時間をかけて習得してほしいことを教えるものではありません。つまり、子育ての長期的な目標を妨げてしまうのです。

子どもにどんなおとなになってほしいのかを考えることで、私たちは子育ての長期的な目標を明確にすることができます。そして日々直面する課題を、子育ての長期的な目標に向かっていくためのチャンスに変えることができます。具体的には、ストレスに対処する、相手を尊重したコミュニケーションをとる、相手をたたかないで衝突を回避する、他人の気持ちを考えるといった方法を教えることです。そしてそうすることが、身体的にも感情的にも他者を傷つけることなく、子どもたちが課題を解決する方法を伝えることにつながります。

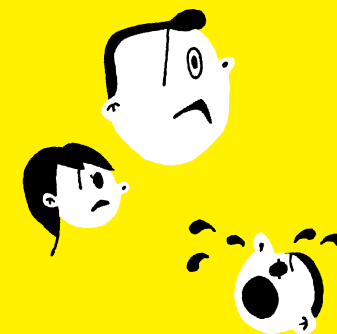


2 温かさを与え、枠組みを示す

子育てにおける自分の方向性が長期的な目標を明確にすることで定まったら、そこにたどり着くためにふたつの強力な道具を使うことができます。ひとつめは「温かさ」です。おとなである私たちは周りに支えられていると感じると、何かに挑戦しようしたり、間違いから学んだり、次はもっとよくやろうという気になります。そして子どもも、自分が尊重され、理解され、信頼されていると感じ、安心感や愛されている確信をもてるときに、最もよく学ぶことができます。

もし子どもが頼りにしているおとなを怖れていたなら、挑戦しようとするモチベーションが下がり、正直でいようと思わなくなり自信もなくなってしまいます。怒ったり、攻撃的になったりする子どももいます。また不安になったり、落ち込んだりする子どももいます。しかし温かい雰囲気や安心感があれば、子どもは失敗を恐れずに、学ぶことができます。やる気が高まり、自信をもち、おとなを信頼します。また思いやりをもち、他者の気持ちを尊重することの大切さも学びます。温かい環境は、私たちの長期的な目標の基盤となるのです。

私たちは、いろいろな方法で子どもたちに「温かさ」を与えることができます。子どもが間違ったときも愛情は変わらないことを伝え、傷ついたり怖がったりしているときは元気づけ、話を聴き、子どもの視点で状況を見て、一緒に遊んだり笑ったりし、課題に直面したときに支え、難しいことに立ち向かうときは励まし、努力や成功を認め、子どもを信じ、信頼していることを伝える方法などがあるでしょう。



ふたつめは「枠組み」です。おとなである私たちは、必要な情報が与えられ、過去の失敗について、落ち着いて誰かに話をしてもらい、次はどうしたらもっとよくできるかを示してもらおうことで、よりよく学ぶことができます。そして子どもも、情報を与えてもらい、目標を達成する建設的な方法を見つける手助けをもらい、ルールや指針についての理由がわかることで、最もよく学ぶことができます。

おとな自身が守らないルールを子どもに課すことや、おとなのサポートなしに課題解決することを期待しながらも、子どもが失敗したら罰を与えることは、子どもを不安にし混乱させます。こうしなければならないと強制しようとするれば、子どもは抵抗します。間違えたとき傷つけられると、子どもは新たなことに挑戦しなくなります。しかし、おとなが子どもにどうしてほしいか手本を示し、良い判断をするための情報を提供すると、子どもはさらに自信や力、自立心を高めることができるのです。

私たちは、いろいろな方法で子どもたちに「枠組み」を示すことができます。良い手本となり、子どもを導き、ルールの理由を説明し、一緒にルールを決め、子どもの考えに耳を傾け、子どもが自身の間違いを正す方法を学ぶ手助けをし、自分の行動が他者に与える影響を教え、子どもとたくさん話をするなどの方法があるでしょう。私たちは、公平かつ柔軟な姿勢を子どもに示し、自らの怒りを抑え、委縮させることなく接することができるのです。

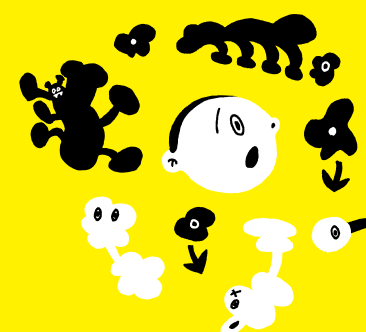
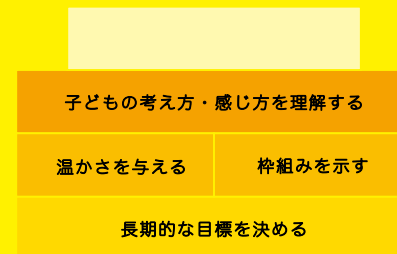


3 子どもの考え方・感じ方を理解する

おとなは子どもに対し、まだその子の発達段階ではできないことを期待することがあります。例えば、赤ちゃんに一晩中寝続けることを期待したり、3歳の子どものじっと座っていることを求めたりということです。また、時に私たちは、子どもがなかなか寝つかなかったり、かんしゃくを起こしたりすると、「頑固だ」とか「甘やかされている」と思うことがあります。子どもが今できることと、おとなが子どもに期待していることが見合っていない場合や、子どもが「悪い」ことをしようとしているとおとなが捉えている場合、私たちの誤った思い込みは不要な衝突を引き起こすことがあります。

1歳、5歳、13歳の子どもの視点で世界を見たとき、子どもの行動の真の理由を理解し始めることができます。そしておとなはより効果的に教えることができるのです。

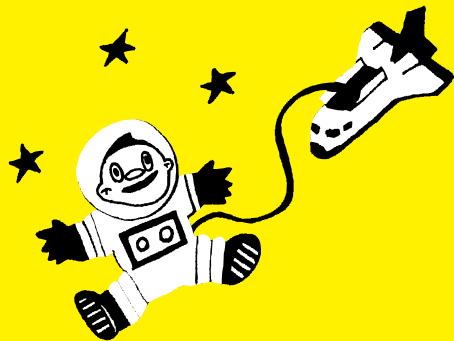
子どもとの関係性は、生まれた瞬間から始まります。最初の数ヶ月は、おとなに対する子どもの信頼を築き、その後何年にもわたる人間関係の基盤となるアタッチメントを形成します。私たちのすべきことは、赤ちゃんが安全で安心できる環境、つまり、子どもの様々な欲求が満たされ、たたかれたり揺さぶられることなく、危ない目にあわずに子どもが探求でき、恐怖を感じるようなときにも支えられ、安心感を得られるような環境を提供することです。子どもたちのコミュニケーションの方法を尊重し、応えてくれると信じられる存在だということを示すことが必要です。



子どもが自分をとりまく世界をもっと理解するにつれて、この心理的な安心感と共に「枠組み」を示し始めることができます。しかし、建設的な方法で対応するためには、子どもの視点で状況を見る必要があります。子どもが泣いたり、「やだ!」と言ったり、足をバタバタさせているときは、私たちに何を伝えようとしているかを理解しなくてははいけません。おとながすべきことは、どのように感情を表現したり、暴力を使わずに、いかに衝突を解決することができるかを子どもに示すことです。

成長するに従い、子どもはもっともっと学びたがります。私たちは子どもの質問を尊重しつつ答えることで、子どもに自分自身を大切にすることを教えます。子どもが探求することを励ますことで、学ぶことへのモチベーションを高めることができます。子どもに問題への解決策を見つけ出す機会を与えることで、子どもが自分自身で課題を解決できるのだと示すことができます。子どもが自分ではできると信じることで、その後に直面する困難をもっとうまく乗り越えられるでしょう。

学校に行き始めると、子どもの世界は急速に広がります。おとなが、攻撃的、暴力的になることなく、衝突や怒り、ストレスに対処する方法を見ることで、子どもたちも、直面する衝突により上手に対処できるようになるでしょう。自分自身を肯定し、思いやりがあり、能力がある人間だととらえている子どもは、適切な判断をすることができるでしょう。人の話を聞くこと、コミュニケーションをとること、他者を尊重することを学んだ子どもは、友達や先生に対してもそのように接することができるでしょう。そして、おとなに支えられている、受け入れられていると感じている子どもは、私たちに助言や助けを求めることができます。



子どもが十代初期を迎える頃には、強い自立心や、身体面・精神面の大きな変化、友達に受け入れられることへの強い欲求が芽生えます。私たちがすべきことは、強いセーフティネットで支えながらも、子どもが自立して考え、自ら判断することを促すことです。また子どもが善悪の判断をできるよう手助けし、ものごとに対処する責任感や、自分でできるという自信をもてるよう支える必要があります。そして、子どもが間違った判断をしたとき、おとなは寄り添って支える必要があります。おとなを信頼できることを学んだ子どもは、私たちの助言に対して耳を傾けるでしょう。おとなの支えや導きを受けた子どもは、より大きな問題が起きる前に、相談するようになるでしょう。

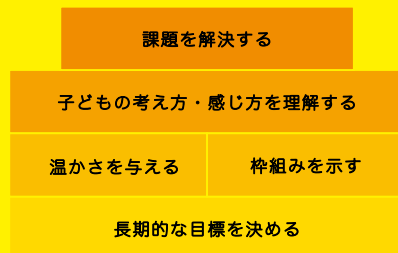


思春期には、子どもは自分のアイデンティティを確立しようともがいています。突然、洋服や音楽の趣味、勉強への意欲、将来の計画などを変えることがあります。思春期の子どもは、私たちとまったく違うアイデンティティを試そうとすることがよくあります。おとなが好まない音楽を聞いたり、服を着たり、おとなが同意しないような考え方をあえてするようになるのです。親とは大きく異なる人間になることで、自分が実際どのような人間なのか、よりわかることができるようになります。

子育ての最終段階にあたるこの時期においては、親子間の信頼が非常に大切になります。子どもたちは私たちが見守っていて、正確かつ正直な言葉や明確な期待と「枠組み」、そして安全な環境を与えてくれるのだということを知る必要があります。時に子どもは失敗します。子どもがもっと小さかった頃と同じく、思春期の子どもにも、おとなが安全な環境や情報を与え、子どもの成長を支えましょう。具体的にはつながりを強め、子どもの活動を見守り、子どもの自立心を育むことで、子どもを支えることができます。

4 課題を解決する

まず子育ての長期的な目標を明確にし、次に目標に近づくために「温かさ」と「枠組み」の両方を与える重要性や子どもの考え方・感じ方を理解したなら、私たちはポジティブ・ディシプリンを使って、日々の課題を解決することができるようになるはずです。



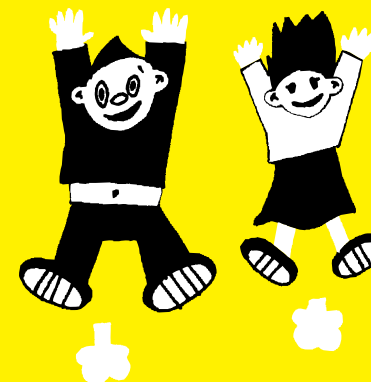
ポジティブ・ディシプリンで対応するということは、子どもの発達段階のニーズに合わせ、「温かさ」と「枠組み」を与えながら、長期的な視野にもとづいて子どもが成長するために必要なことを教えることです。よく考えながら実践を重ねることが大切です。

もしあなたが困難な状況にあるとき、行動にうつす前に下記の手順にそって、考えてみましょう。

1. あなたの子育ての長期的な目標について考える。
2. 子どもはおとなに尊重され、理解されて、安心して愛されていることを感じる必要があることを思い出す。
3. 自分自身に質問しましょう：子どもが課題を解決するためには何を理解する必要があるでしょう？ この状況で何をしたら、あなたの子育ての長期的目標に到達することができるでしょう？
4. 発達段階に応じて子どもがどのように考え、感じるのか考慮する。状況を子どもの目線で見、子どもの思考プロセスを踏まえ考える。自分自身に質問しましょう：あなたの子どもだったら、この状況をどう説明すると思いますか？
5. 子どもを尊重する姿勢で接し、役立つ情報を与え、あなたの子育ての長期的な目標に近づくような方法で対応すること。



子どもとの関係がうまくいっていないときは、常に建設的に接することは簡単ではありません。あらかじめよく考え、私たちの対応について計画することが賢明と言えます。そして、練習、練習、練習です。



なぜ ポジティブ・ディシプリン？

2006年の国連による調査・研究「子どもに対する暴力」の結果、家庭における子どもへの不適切な関わりが、世界中で何百万人もの子どもたちに影響を及ぼしている世界的な課題であることがわかりました。子どもへの身体的な暴力の多くは、罰を与えるという理由で、あるいは文化的信念によって、子どもは身体的痛みから学ぶものとして行われてきました。この調査・研究は、すべての環境における子どもへの体罰を撤廃し、非暴力的な子育て、ポジティブ・ディシプリンをすすめることを推奨しています。

セーブ・ザ・チルドレンは、子どもの権利のパイオニアとして約100年の歴史を持つ、子ども支援専門の国際 NGO です。生きる・育つ・守られる・参加する「子どもの権利」を実現するために、日本をはじめ世界中の子どもたちのために、子どもたちとともに活動しています。

本紙の内容は、カナダのマニトバ大学のジョーン・E・デュラント博士著の
“Positive Discipline in Everyday Parenting” を邦訳したものです。



イラスト：大西 洋

